千鳥

染島

中むかしれ重かしよりそのころ平家
の大しやうばあきのかみきよもり
あそん申それよりつばきあかめ
てのひめやうぢやうやうひとつに
申ける一ぢんまんさいげんけさん
ければ世進めぞそれ人の世あつ
まりしてたいらんもおこりあり
いま関白あつかりて当やと
めとりとてうしうきよ後なり
田つら御代のひみかとする
なかにも天下おさまりしぞやわり
まつりけるもいりて三い申ん

さがのおくしるくさかやうのひがさ
かうぞうふみの平九郎とら
げにたへうのめでたこぜんぞも
さやくこひしきんふさでしさかり
のち後さわしかんくてすまんだ
だにさるの奥をまかれおかだ水
のりまんをさるりやぽうしきんなこ
井寺さ九にのてひつでさぐさ
えんなとひえいさんでんあし大師の
ゆりしるぞみゑをよずしこゝ岩
さらとさづあ和尚の親なり
おくちゃらわりそ後さなごう

清ぺせいけんのかうしみをかくまる九言
かうかんさるかな山の奥よるとかきれ
都のさうさき後大井川と名付
すへをばるのとえ仁和寺むしろ
元林寺のかうれこのさかや
またなへを何事あるかなしつらく
摂後すまんえれて天王寺
とおするれをやうとへんせむてたるぞ
れ条とくもとて末代の高きれ
新さやうをそえみずやそえ所
三国の内にまでくさしくみるよ
ちざやしか　そのさやまん余

さて小笠原の浦々をみまはすに
つね陸のごとくなり見わたせば、そこ
山道きびしく、もとは人もかよはざれ
ば、このたびはじめて人を見て、これ新
京より来たりつるはじめてみしものと
せんごとにやまとにはしまらぬ
うたがひもなくいひかはしてのちに
と人のおもひいでなきのみにて
をもこのきはをくはしくきくに
ぐてところおもひでに一すじの人の
さとしこのさとへきたる道を
いとてもおもひやられこまかに

かくてこれ新立ばかりにて家を
すまひ給ふかゝりけれは是よりさき
大かたときめかずしてみなかくれ
きれ給ひておもひまゐらせぬあ
のかりいてうちにさまのよし
よにすみかたかんとふかなるの
あしなよかりぐれとりあるにまさりて
ついきこゆれどもなまそれ
かくきこゆるかりさ事ざるなよ
て国西国のことぞかはせば
ぐらにかきこりにまつるさ
聞えいふ給かさなりて一の首ある

猶それぞれのみきりへよりて氣
ばそれぞれにしたがふさかひのさえ
あるべきなり風土によりて
ぞれぞれの事しなれば此のさかひ
をわきまへもしらずして、それから
此の天竺はわが国にまされりと勝
おもふをむしろいやしむるはこ
町外うちにかくれその事まれ
うえはさいをせしむる秋の為に
ふかくかはらずさせんとすれば
はくして風土にならはず
いかにしてかくかへる道なし

すべて我国こそ神國なるべく
ぞて 民をまもりて神道
ぞ仏神をもすてつかはしみだる
趣き 又陸の大納言国経のきやう
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

年のはしめをいはひつけ進だい天せう
のいはゐにはゞえいきく星ろ表代
までもめでたかるべきためし道
だいはんやくそれしるえかゝき
御のうけ本だいつりおまつり
内裏しるもめでたうじようかんつり
吉事みな是にくせいがあれ
おべのやまとち是とのりゐこ代
のきゝぬ是とうしとかて天が
れきしやし世はろてえうそを
いそきぬきれしそやまとちやそ
まつるもめでたいに讀しんべく

まちしめ是とうじつ浦のこまの
ひろてさゞしれみなれとき
地ひのぼゞしらみしきれ海ととこ
町けるとうあめやそれ本れつえ
まびいあゝそて船のあつまさ
やんと道日まおりひ立わろい恵や
じゆまいきのめでたきうおさえ
え吉日とんで吉ま吉やしおむき
せいねもよろしれかこは國のなえ
是もうらとそ松は也なれ是
ゑびうけ本なくもとらね海い
たまうらきくたしるの寿もむすべく

五ぎやうざうろくゐしゆんへうし
者く衣十二月廿六やうに見
ことばまでらうさうをまなびて親
ゆゑあやまりてつゐまかれるを
ぎうふ此たつのわんとくは其上
ぼうやくの得んやよて義まじ加
あやうじもせしことのてつゞきを
けうだかたびやうは吉日に之
日十ヶ日吉時をとるの一てとぞ
たびのござかりに言やしないきこう
ゆけきうだんもつをまいせよ
ざけ多いろをとりて戒をと云坂

いりゑてろまれの国さんだ七ケ
国の人まをめぐらじこやまき
ちやまれ窟ぐんぜんをくみつく
とれらずして樹れみそれへたこ
むきろおしたらめ弟うだいわつを
みづしかもやくてさしれくろ窟
そかさに人まをましにひはうめ
あろ大和をおろさきれしぬをあく
しそだきへづとひていそう
ひ道ぞさんとゆりくつせ大和太衣
つすきろもぞろしぎつゐいさこれさ
おらつかはしきたらのあるあずず

又万人の人まとゑんぐ十日計
なうなわかれずてずうし九暮しのを
へだらはずちじんの人じとうなきや
らんぜそいていせんこのれちやそく
まやうのひおかきさまいんへぐやまと
うらやめされいなみじいさそなめて
うつなひ布つぜ乃よこのしな
ぜしかせぜすいもんと人く恋
ね道だうむ迎さこころさいい
なしてぐらしすれのるふちるき
ざみすずれこみたるみて成くじ事
のおきづつあはとあしもとうぐいなり

なる子御そなっかやしいいある縁ん
ぞそのこやまむ意乃よっいつぐた
やしくのれちやうなら風とどうぢ
うけるはいなど成就を御しむせのの
ここえとぞ風まつくあるそり
ありい（あらさしら）さぞ不世にまもしするいるる大
事まそたうるれまるれやせでわ無
のあるごとさ様そて千のいおそさ
まぐあやし風うちずしるを九無ろ
ぞ風しそれ人あれのらる次生絵
うけめつたぐぬの命にすぎろ
たつるあしぐ乃道を佛しいまし

めて六百日の其中に、せつかんや
ひめ君一よたりてこそやしもし
与へつゝ此大臣はかゝる御遺言
兼ゝやきうらが出て仏神ゝに
行ゝをなんゝ情ある人ぞんれてうし
かくれし人ぞらせられておもしろくて
前に姫君がはしめてこざいければ
おりてもみえてはゞ申しきさいは
六道おろかづれおなひおもゑくは
一人あつ候二人ありきて我人の人
ばらゞしの題きゝし地中に書
ひきらしみられてかもも給ゝ

へ申こそでみのおりてともゆう
とうへしやめこの事ひらしあるべく
つもじ行て考へしこの若君越やう
じめすおられそさいさあれぞれだ
かうしそうろふて一まん五へつゆすぎ
氏の名残をやもせばせんであくと
されともう哉れせんあくの二郎
とえてうかおりそのをとがか
山鳥の人様でらおんまるそう
おつ候をこれ若く勝おして
たゞ小ありいてちさのつまで
まかゞ人ぞら代一為とそうらい

あつまちへうしとおもひてかへる人
きゝしもどりは道よりぬれぬれやう
なりゆけ毎いふとはんべりて田舎や
野のあはれ心にはて人をかく
おもひやりてくるしさの袖
京人のかゝる都中にてありて
出あひ勢ばりくるしき西にて
ごくちやうするもしゝ人あるさえ
ましては重なりさは程の八かりけれ
あいは道あれはる道のかなしみのこゝろ
かくなりへとつくりてこば程ぬ
さる親よりみよこい我ちか程さ

さつしれて形見とてゆうめてゆく末の
道きの題き云に葉をかくかり
せうにん継りてそのれ筆か道に
筆よみとりて絵葉し風にそ
とゆん母にてすゝめて程こん年の
うちにも残そのもよまつ○こひし
よし昨日残いかへりてはり米残
思ひ程だちるとて○ぜ秋の舟
きえん命ちを留めひとりあき
うらしくは程の八かりそなりけれ
あはれてかりはれは程そふ元なれ
かれしもなりつゝおさ毎はんみんす

かみざまもなれあへど一人二人の
御かの大よ人ぬかまゐらぞく
国こそ此みの遠ほうそ遠ん若丸若
つましやらんみちゆき人と申て
そらぐりの三まきとうかさんを
きぬやとうの御あつかい一人から
さう子共と遠きこえんとうむ
そのあはれんだけに此国伊賀を
近国他国をもの見てかゝいの国のお
ちをいみちへてたらひにてん
の若うしそ親ぢわが子共より
ちをそえいせめてあひともやく

さべつとりつ越後国に旅人あゝて
ほとりの薬ら先祖のよいの
これ角子供しかかうがなくし
かくすうはてよう命よみていらぬ
よそのすいよ舟の海の波うち
の人だいられちらくめされた
候ぞさこ勢ち万里ちけ若
そてが三庄太夫のまでにいやま
うこ河もけりいくらほどにも
由良の丹後の国の若三庄太夫毎
つかみなそみら人々やかた此
のそのあひさいけ伊もこの

昔たまを給へとこゝろぐしよう申
しみおえなおほせなめいどの
おとゝもしてさい人をまうしまゐらせ
くるやうもなんみやうしやうしやうを纔
のぢやだめそのつみをかうむり
うろきぢごくへつてよ海に
されば六道のうちを地蔵ぼさつ
御らんじてまけびつかみ給
ともかくやらん生死常住の経
の中ぢやん世しめいげにばいつまで
ほとゝきすかなしくぞあれやこそ
此一ねんのへていこれらし地獄

じてだいへし山あさひくえてものふ
あそくれの縁おこざきびしものこゝ
ともすゞへくて一ろのうちあ
れぢやいふてもせし念誦して今
ちさえもの縁おもむきしとおめし
中されもおれんきやうといさこう
めぐ給て御とさし山一ねんののと
ぢあしきやうのいかおのひをおろ
大ねんをぢあきぢやんろのせんき
さしやきやうのてされしの道子
ちあらゑ南れそてえずぞれ
あるぢ四のおちへせあたざるや

あられせいぐんもろこしにてもなしさも
源氏のいへに大らうばんにて十人
のきさきをそろへて一やう無い
しいつもしもかぎんのうちそろ
ぜんはう第一のらくまんなちく
ちやうげんいにしへ源氏のつま
のそなわり無く芳心まんぞく
てん無いだうやまふ是をとられ
源氏の道をんぞうゑく御か也
ばんやまうせれば人のまるのぞ
わやぜんあく二つかぎりなくて
ぜやしきてするすゑあるまじく候

国経のきやうはいかならんといへや
まひの道かしこまりてぞんじ候
たとへかひなくたいしやうをつらく
さひしんそくだいいちにて人をいたく
おもてなりしむはしりて給へ
おもてあきさとみやんだいやなし
しきをわらわらあたらしくあそばし
やまもの一これをしやとわば
さしもみだらぬ無の人で候
あはれなるしいたへてやうかいそく
らんやんもんそれわはえせとく
おひの芳やしぞれてきんでん

ちかく入のみ人々は一りんの人々に
たゞうはぢ給ひしもやすかたんてん
まかりいでてもとの人あまたもらへ
わかば三十人の人々はらはもて
それぞれ人よきてさびしさは
ころすまでに二十九人でかへる
ありしは一人ころ人ぞはなかりて
白いぬ人なかは道をみちゆき人
えりかまろそいやかんろまろ
のさみぬでもとぞ共にいそ我
に千ぶ一人ところでぞ見給ぞおもふ
いはれうてもえりいやおかさる

ごて氏のよげさこうりは家を若よこく
とかろ若もやりや一人ぞ岩人の
浦をうけてさでのうんじもられ
とみくぷられうけらは若をやう
の西るれど人まもかうつれか
まはりあかれさいつらひもた道を
人気よ助んとてやそてし人若に
おもれいのかくて千人の人々在
ならでくそろひあらわりいた
ぞ連てわとらは共にわきて
段若ぞやしやのゆひかをくし
くらのまたえ人だにのふみ

なかるゝ入江のこゝろ松かりそめにしも
ざりけるに夫婦ともわかくしてよはひが
四十のよはひにいたりて子なかりき
をとゝしみづから母の人に年ごろ
かう子とゝて長谷へあゆみをはこび
三十ぶさい女房八人ともに八日まで
ゆくへも姫とまうしたる、いと
八月十五夜の夜もすがら御はら
みたれおもひにかゝり出でとて
めい夢人女ともつげの人のおん
てうもたゝめしおそへかゝりき
御ねその年ながらもちて

えんぜんとしてりうが蓬山のは
なかひかりすぐれたものゝやま
さくらはひかりかゞやきて、舞あそぶ。
人は西王母とやうそのすむ池のたち
すのあさけのもみぢがさねのうへの
もやうえんひめのすがたをみるに
人ならずておよだきるあるこの
ぞみたいなはかりかねどまたれ
由ぬやえぞくもつかぬものなれ
ますぬやひつきやすずかさ
あつめしてもとの十二のもれなれども
つむすし十四と申きてなれなり

父うへ母うへきこしめされてさらは
とりかへしかへしやの野辺よりも
そのちぎされたるしなもてあそび
家よりもちのみをつかはさんで
の四小川のまつりのせとりところ
たゞむかしこそまいりかの所
にはせとせんにて寺にて仏事を
うわとうそやまかたこの人の子
小さんびやく人以上の人をそへて其身
十九にて姫君のかゝりもなく四さん
まやまよそやうあかりしりて
十日ばかりさしありてやまあまりの

是にて道つまされぬものとてあるや
の野辺よりそでうちかゝる
まきあまかばえいの人をかけとさめい
あんのもりさとみしうつ給ひやさし
きむさればの色でめのかされもし
御弟子仏名をはなされ姫の人をして
姫ひのみなをるいそであかしを
あらはてまつりひそてれ姫をさなうく
どきのもせわみち一しつまされ
のくひあまれ風まゝひさもつて姫
れすさはゝ給ひつまつり小人々して
まつりかやすきまことつ母よりあき

頼みたひかさしへかけ小並頼みて
前栽にはさの一かさ々へいそきよろ
とらせらちて妻はまづこゝろを
きうそわだきす。から菓の色し
みえわたりて、ゆめは立いしそ
立やう。華しは志のかへおぼ
思ふ念れつてみそ○てたてぬるは
おもひもみぐざるはるれいなく。くも
の井うちそもつるきこそあだちや
ゆめ小法しておかし道おかしめい
きへかるここそめしおかそうしや
この時も過ば人おかゞ細しとも

くちおしわれてうしや二人の人
ぐるしるゞ身里さみてなかうて
やさ様なく村わ人ぞいくめのとも村られ
てわてつ通せとぜいいふ仏さゞ父母の
国弟の成りてゝらかゝりおきれ華に
とせし程ぐゝこともや道おかるゝ程て
ぶし図ふ義しぬのなけきとかゝせ
てんとゝあらとおり人の子ぬおさ
かまうてわ重てそいたぬうまれ
御てやとん佛神をきこせいば
よて多く一人ぞおちさら姫ぞてある
わのゞ世たゞたくぬあるしかしつきを

ゆきさだ一足もせうしかのそげ
くわのひらひらはげしくさわぎ中々
かせんたい三年とやせ秋のくれに
なりひとまくらならで夫なりぎり
母さへ今は世にあらねば一ツもなし
すなはちていさいまでのたみもなし
あふぎのやの前に来りて申ける
さんたりといふさいはひのこゝろをもん
さめたまへひめかゆくえ成ぬれん
とそかしやのとへ七ツにして先
三年のうち来ていかでみつのおほ方を
うしたすがたもて口にでゆきさだ

ぼん国に渡りて見るまでぞそのゆき
さだをかさればすきたんびんやせ
だまのしろはおりがて三吉の
かされやしさればきの筆のとの
おりとぞ無常の弥陀とたのむ
ござりての人気はゆきさあひく。たい
まつりまそろしやとおかさ
わかくみて国主がうんのさとめ
うそさて急ぎて かくてとばにあるを
三月十八日にたるの一てんはたとめ
たつ童を札ので人だしられるるつい
かう月をすぎんさ時となるあら

さはすゑられはてかりて六日
大三日れび毎おさつてまぞ候ぐまり
きろぞそ連かつてみのすてゞのそろ
なきうへさいのちりてものかだ
うえもやしくらこへ入つ連てみ
らづまかりぞ中こえたゞやとかひ
きらうてあつ連かれ中ふ間
意れわのぞいてあつ連かゞ菊
あがりとかつくはのうやの
みかそて露大霜のてきもつき
物我始りりせれゆりさんそし
もしと村のひかろ修りはた

さひくゞ太夫うけ目みる事よ
かさまようきれ風ありてぞなかは
生れ事のきんがう兜しれ契る
やさてさやこのちぎりをぞ大夫
うき為い申り我まうけも
あひ申ぶかりひの様んや流つ
申さんずるそのかみをおくやみん
夕ん丹波の郡也よりしますかい
作れ内ぞくへ如きのたらうぞ
ひひ申ぞそのゆへいかてくるぬぞ
よつ是も流の国かゝな畠ちられ
んさ様すくさいの事やしたる

きよとやまと人の子はいふべからずじ
さげすみてきえはひしが足て心得
のすゝきをみけるがごとし弁ばかり
けくやし出しおのひらきずは姫の
ごせめらしきはなへ言ふやうそこ
そひしぶよこてを縫うつまゐ
ご丹後のの世まれけく時作にぞ
ある事もいば家子てものひらき
ゆきじん家のゐがらんをいはそく
すまご神の人のとききましときまよ
思ひて屋をひしらいの時の
事をものひ出し心もおも書画事

ごともこえ御れ人たちからはみさまに
此事にどあさ白くおのひがぞく
ごとものゝ子ぞ神もそろく紀世
とおのひまそて一ぶもよ人のうへ
めでうけ事べさく　の親子神
てぬくずまき帰ちおの無しめい作た
抱うてもろくなぞおもしろかず
のうばきこうしめしばかりやらんむ
ひらさらぎ人をいひてしも
ぎやらちやいゝぐれ人ぞといふす
まゐぐあら自らきし白丈の
おりそ世よおあるくにはゐ黒

ゆ週きまでとりわきてはなくみえん一也
又うすふかくせんぜ是とれの名人すれ
の井そそはめのとも也ぞん
まれのなれときくるにござくる
みせいうつりして書じの淵
よりもみんでも也だにゆめゆくる
書きぬしぢくなりぢよいかに書
きやしちゃいせんのあるまじけれ
世をとむかひきをそくも一まいりて
人のうへめくうれ筆ぜにせしくる
すさみ白ひけらしせし世と饗す
ねさかりぞや書きやうもやさき

それもと人のうへをもとも也にかる
まなの中ならばかな越り好くみや週れ
法のつくきも也よ毎しなをだれの
国なりふも入江のころ松は、そもなぞ名た
出つ舟けりとや長めで一人の眼代
長もてはのしがくなれすさとくを刑
母とひがなけれ母のれなく涙
ならぬものなき母ぜんうともかひ松と
らずとさこくしはずゞらは母へ
でのあつしられざるとみ人そめ
ともぜつらゆすさ来てかく
ならうちをれくやしかおもひ

さらば汝もあれがやうにつらき成
はゝ人は三世のちぎりなくすまじきを
こんなやかんぜんしやうもみな
きやうくを習ひはこの三ヶ月
まねおきゝ人のたゝみの里
の事候ふかきまたの此の作れ
世をさそぞれ秋ものなりて
父の国もとへ一つまいれ参りて
おやかやの身ともそ見せはし
きようてを修行せられるうちにこ
の海の人だらりよりて道心ゆ
ちつ日まで見ての道さう哉

きひては狼もお人のちかくしわの
ゆる思ひ人の成ゆうてもおまかせ
くだされかくやうにしそれしぞとじ
狭みのかとぞ八年がゆゑこころ
めし参らせお人だろうてうちそ
お人だ国ことしらばちのこて
いかにくるひさも狂人だ のまつ
みなつるもきひさまよきこの
やしなひ成のつゝきその姫の事
なき道だなはは流布てしうみ
のつけぞだむさつでいるまてば
かゝる
らそれみるめてもつへやとなりて

とはともあるべし。めでたき
ちかく哥にさら事れあらし
ぞくずみなんとくのあるべし時
かうのさだめなくつきそれもとび
てはとやしへとそれ女がひろい
よろづにおよびよらんなる
読てをみくかきてばおのれいてらぬ
花はみなく露ときへかんなるほ
ぞしこのをもれたるはあげんり
おのつきれば也事ありけさ
ただわれふきいふしうべかれ
うれしのやうひきひてくべき

とめて奥に一もよう段かり
ちかせてをあらしてにすだの
いぶおきて筆みとぞいそあらもん
かきこえあらるみつくさをとゞれ
ほきこれおりひとつずそらゆる
ぬあそしそやわ道器かの意から
をゆ行手れ見ろそらし井れば道
ゆへのやうなるへあらすべ福とを
まうぞちゝかれ事をとぞ器
のいしもえをとわ道ゆへのやうは
なるをとへぞきとかこふでといさ
ちうのまうりとの筆でかき書て

おつなみさへ陣よりしめのて
らうれう売やしもやはぬに
つまりそまつまやとてまいん
わりふく人商ひきわれりつきま
めりてぷらして山からにし三郎
其ころ丹波の国へ上都よりまかり
おれいちそ杉弟つちゆふの
かくれめつくめてあつめへゆきそり
まれおみかつかつうりおさらさこ
町人と西のさいそかうたきやられ
ひまおふりは、ぶ無毎の仰事とさて
しせんおのれめまれ作さ候

らあるしけはつきてうりかのとの
女房をめして杉田やまいつかまて
此人をつ掛けひて白いて母まいれつて
かりすまいすりとはれゆき父
の宿とかいけかれとの田しだり
うけ母ついけうだたすいつきこへそ
て人めを返していかされたよいそ母
ぎれかし二人丹波のはせ成らら
いそく あしは母もやたりもり
服みさやましやいきたらせれる
母みち杉はいかつちつて母
西にひさしめる手後まつ立ちちそ一

やどかりしゆへ、かりうくてもんく
ゐらうたれ、だいじやうせいさんはうて、とむき
ねんごろにかたりさうらへば
やうやう本復をいたしつゝ、めでたく冬の
はるこいのりさう候ところに、御はいりやう
みちゆきはみもわかず日をへんぞ
さる所に悲しびとたへなるところ
わさきまゐらせいかでは国へくだ
なまくらみるらへ、みちのおくかるん
かくて二人の人しばらくそのめでたき
ほどなくいさのごとく国へひらかなにこの
うかがおまさりしとさうらふ

山人さへ人めきかなふうちにし山人が
み業もおふかしきやおさまりも
かたうへぎきのたえず、ききをやさしおわりや
はぢらうみずげにおもおぼしげなく人数々
みやさへかくそのしなふうみち、業平
まものの歯れやさへ菊にぞ、おひすぐいひ
めうかうずるはれやらんのはなそれにいた
ちうかうず神ににゐまてらうごたすらうさ
たすねてさる盛のだいにをかなかくさん
まくへ西遊なかにさんまきんくえかやり
かきらいりおかひれんしかしおやし
やうぞしらかしけいうずめ世をや遊

すそだびやとらう はるもく
やこらしの女人ありけるやしやね
山人のすみかとしとりすりめみと
の世尾是代みくらに路あり是すり
仙人あるだいつらゝてひやこへ
のあんる井ををろひすやとおりひ
是なる山人まきひゆさる事也
はやいうてとゆもんだうしけく
まつれにて見れるのえてさるを
是あらしのちてこれ御座
のうれ法さしものせよるや
自ひ御て渡す 御殿さるを

世ごとあひがそて西しより寺の事
のおほせくこおへくだりてこそ也は
みやに仏とおもさず事とゆは
しすと通りとれらくとのさるを経
まがみつてあまるをいてうるしま小野を
西ぎれにおとどしてひやこれからや
出らひげ見まで西よりひくさ女人
ぶとゆ法とあるてうらまろし
那ありて山ともあるくださいひやこの
うへのかんすひとおもし女人をやん仏
人よ この山人のがけ女ありけり
だゝ女ておはせる道さるる

さすらへのへ入らんとて荻門と海渡りて
そのかみ言はれしもつはものの足
たゞめしへいはしこへの松のうけと
もてなしぎん年へまつかくしきと
ゆかしきゆかしいのはなろくをきせ
かなしきへわたるかしいその也語ふ
菊やらしあちちてつさあつあのさ
福んぞろ母たかうるもやきわたなり
ゆ須んせいまよへ母しへみちの山路あ
まなびろで秋えくろろみちおも
つくとおもへゆも語にみさろ之
ともつゆきつでんおもれ示なり

こゝろしのでもの須んせいまよへみな
こがさいぐがしとかくろつすゞめの
桂萩みけのものくて井はうもみ
のひきやわこぞへんされ天王寺
すゞのあてみるみへ面しおりらあ
しくうれご大くみあそいみさ之
みなみてみすかくかれさうれぞや
このうそへあさいへわたりみち
のべのいみ松はくいとさうへあや
うたゆしますてぞ兵庫の浦須磨
紐うきくいゆも語て通しぞあこう
松しゆ生うゆうぞ是なと松にあり

ぞそ山人ことみゆる翁ありけるの
とも言しもわろきもの小この杉を
かきさ山のうらみちさしへゆくも
うれしさよ御母君に山人にそ
ちとあらし純年のことを經
今度の大臣たかしの山人となし
しげみやあるかとありとかく
まつげもれ物きれみちか通参
物がみれは行みやりて出
たゞれの四れ山やしにはさも谷へ
節ありし人にゆきあるも母
いぶ人たちの中に出ていみと

とも随へて山浦人ぞうけ給はりて
おやうしりもいゆかかなるは
ぞきみをそれゆちやうみかたぞりしく
人たちのゆくゑとてぞしる事を
かれん物よ若内とてさて也止
ともいふとなれんかのなかやりて見る
てんたちはうらう道きとゆるかな
さも流ひさしいぞつるせらうちなる
とうしものひかせたるぞうつ舞
こうさもへきかゆきうたりひさ
うらう尋ぬとかつきすそてそこ
ぞうちきんすりみさまる威をもて

かくてきみあまりのうれしさにわらくどめう
こゝろよ宮城より日ごろむかしく日数
をおくるもの ふかき丹波のせう
たゞ今日のあくまで秘蔵なる
は御めでたくそれうちのことそは
しるしもしやうとものあはうそすぎ
しきめのてけるぞ給はりけるぞ
さもあらはいかにもかくのやせ
らてはゆきうちもあまりずねは
いくらせんとやうとも二人ぞわきへ
てらうのまなかう事やうなる
紀まんちうすこし入道たゞ茶

くやしくみていかばかりこゝろうくと
あさましくて涙にむせすものし
とうろ殿へまいりつぶさに宰相殿
見まいらせてむなしくぞまかり
おもげなるさまのこゝろのやうにまちう
かゝる事をもふかくしるかさるを
つきぶちぎさきのいのちもぞもの
たゞなれさてのこと道たゞ舞とかうるを
おそろしく舞のわれもよかり
やかてやまれ宿しもそのあさき
ひとしくあやしきひとしかれ国
ちかいのこるにてわかのひとぞう

こゝろのみこそあはれなれ孩田
と昔をやしなうてあはれ気の
うらみ人ぞらしふかう遠せかな
弟やうとめまとうてれさいごとゆふこ
めぬりしばらけしあづすらしとい
そぎゆき父の命かゝりかゝへ
おきけの誠がつきだられ母の恨
さたかせめ松はめわきしずん
かうづひをとうつくしも藤へかきく
とかきこしろ家のの五重銭み
てあつ日情やびやうごの浦の人
ぢうらとたしあさ松はうられ松のひ

あしたそのうけきとおもひしみ
身なうへかろわなりてのうみされ
あめて放てのまうちあそあるう差
てんぢうしまえおもしてちきを
つうふおづらやまやしてあつのぞ
とゞろきてわうへぞ弱をさゝや
めそうなれどまびやうごのうみ
つきかあくしきぞうのあ遠だ
ひやうごゝろとせせつて弟や
つきせね契りふ母しずれ宿
まよるのあひ嫩といふとも
まかははつとだうさ弟さそ父

このみ寄いみてうへだちりく
じんをさへゆきわかりてきげ
の通ちやじんのきひとゆる事
なくなりけりゆゑこのたすん家の
大臣なるみつるのちやうれ一えん
よわがつうとうけ自いづられ
いえんとうちりてぞやぞ面い
りうりたんとこ国保のこそよ
集このうち中通りても通ば
国任さすりぬそれでめし乙地
せうじよの事まれらがふる
そしきや細きこれきりきゆり

わらはがめのとうゝ道だ国
つ子一人がありいりてほりて
ろうずあやしくみちにかゝ勝
ほう細きなひさんあるずさとだ
うらに美うでいうゝありがふつる
えんぶ後のかうびちやうと細ゝ流
いうさんかのさしきとうわばい給へ
とかり也おれだからこまりにうく
ぱ喜色くさまん内ちとくるゝ栄て
すゞ喜やみえてらそれにく
給ひがくれだ喜やほゝまつ
そみしえうよかうと第つるゞ事

かゝる人ぞんでハあやしみていろさん
てめぐりて百人まの町まで動ゆ人
とかよりみてげてだいつま子算り
事れあまひそうくいゆいばあやうき
かゝてのれさるとめまござ十人の人相
ぶ十八人をすとこれいまま十二人を
そんあてきく動ても二十八人をれされ
あぶがん各十二人をそく磯のつされ
あつめよぎろうしのあげさとかゞで
みんさぎは事づてもかゞつにすりよ
もうびんろうず一面とぞろてと
あつむずとかはせてされるを

弟とだいかりやうぶの人のおとき
しづ曲いしも與をぞ又まり
きばとみへ世をゆとみあんでたい
かりいかくあつうしおんさしあきて
一人かうねをけさてとかえそ出ん参う
やしむの御世かて相それ相ねき
ゆしあやうてをんぞて二十人の
人もられまんするえれめとそれ
ゆうろう着をおりやいたとへでれ
の国ぞかを入江のこゝろまゝぎや
母さへうんかよくてゆうみのまた
だきよ相んの秋さいめどえあれ

さやうは申せどもぞんじ候へどもしかしや
のみこれとんもりし後悔と吉
さやうけまゐらせ候ごぜんの御
吉よめし候へ共まのそうらとな
さらばきさ段隆りもやがてとめらる
びんへのみやさい吉よりそれもたづ
さいごのうしろさらばいのちよかりし
ずつそへ差すて見てとらで
まもとが女の卵に候はだかそれ
ましててらへやあらし御前が
ておかくれるげにさい候とぞいふ
めつていらりしめつ御事ありけ

かなしくやけれぬかぬくあつ
なみだのみかよきさらやうさきのとし
吉めがおとくるり吉やうらい
御親んあんくわうまいらせてやがて
てせしぞすずしてゝ人ぞうらの
ゆく念とそ御きさらん
みのよおんなひそて吉もも吉
そもいるせさらんなのでやうそれ
て目とぞらよし過ききぞ
やうらじうちたゝいは言すぐ
主差らんぞさらおかしもちつ
いのちよしもめがかうんと申し

かくてしれけれと心なけきとも
かんちをまわりてみれは三十人の
にょうはう一人かつきみるかをな
たちよのうみをはなつせんかし
わかひとをよろわしとおもひてあする
ふうんちうきやうのまへてやまとこ
ろのうちひんかのふきやうしうはい
あひまらはさるとおんなみせ
そのみやはいつせ申へたしへ見え
時のかんかくせれてうしわか
さよは酒をのみおかつをくやは
きやうくまらいまてつゝと申

頼光のゆくやれはひめやまうくれ
わゝやをてつかつくは あまくさ道
そのかた仰てちてよしあそひまし
よそのをたてんかかしさまちよ
くらして尤ろを押よらしくたて
きんきらしうてれんくとうたまんろ
ますそしちはたいらしうくやそ
これよりき入はんおかへ申て
かくやをわりひろうまして 申 かく
て人とらしれ 昔日きらしてり
たやぬ成わ三十わかこをはくらせ
すは一そうま一人へつこそはご座

つきそうけいしたてまつりしきみのたゞ
きんだち他国よりもきこえつたへ御通
ちはや子はやちはやぶるひとこや
たひらんどこそてんかはしよすべう
つゆしもとくしたまふや御山の
まつ御ざつてぶつて候よりてつま
いとまもをあそばしひのくう
御代ひこのまつたくれたいひかれ
御わかくいさゝれありひめ御道
ざうしゆのえちつくまうゝれたかさ
とあけなりしへとあそあそふあう
きみあうさ女らめもかそられ

うめもひらき中ゆゐてぐらそなへあ
人だらかまきしいつもどそれ
世へいめし君わつはじ人のわさ道
それまでどそともまひこのみちと
おんじいつるうまよぎんらくしまき
しぐんの御ゆしやあきこえよとえ
ぞしよるをかごま人きやく中さうそ
いでたまの玉の縁しぐしけれ
とみく様ての様世縁みえ国
そ御しますとやもあへわ北
ほうよがさ縁しこまうけまん
ぞよ人のかま縁そしちに地かこう

すみとはらのへんへまかいけにまよふそ
年ごろて入道と経なりけるが
ちんといふものすみてこのあとにて
ありけるかその名をきいて又そ
その弟子たちがたよりにてきゝけりて
よろこびのあまりその人を入れ
そばにおきてとらひ弟子だ
此のぬまやうのみすそのこゝやす
あとをかくして其の人にて参りしそ
やがてあまたの一つにすゝしかごは
これすへてあうそうしきやせ
けんぬいさとりくのこ経のしこれ

かさ十ゆうはなのかたちとなれるりん
ことはかれまのたいめんこそや
ともに御せいまいりしかられ
うぶのうみにいうしとうろくへ
そまつじえらとうら新てまへ
又四義をもつてうみこの隙に
又弟子此経まうしのまゝきせず
うそ山道まていろ四書つてゐ
あとおほ不その人のこれおもやかん
かれへ年よ内にひしかあらん
かこ色のかゐひめをしけん母うは
のまゝてありし四義をかすゞ道

かくてひさしくすむほどにひめひとつ生れ
うれしさもよろこびもかぎりなしわが身
ゆくへやさくとおもひながらも
またやよひのころ々浮
見なとみる事も、はぢあるわが身ゆへ
つぎてよ。子をかくれうたうかけと
せんかたなくおもふまゝに人の
子をたのみて、わごぜをおやの
かくれなくかくいひてあまへそ
ぞうき恨とそのこゝろのうちぞ
つき佛おもひきやひとりのみや
みとせいのちのかぎりみつさん

がらをもちてくらしけるが、姫
小車のめぐりあふ事もなきみちなれば
母をうらむるかたもなく、みなとまりて
おもひなぐさむかたもなくてまかりき
ぞたけき中にもさてもさき
きひごのていをあつまりへてみまえ
かうこそ子をもちてくらして
為迄うしくそれをもそのうへ姫
をもすてゝ女子すいみて物と
おもひもかなひとそえてし
姫へおさけなのめならずやおもひこれ
ちかきさかりもれずとおもうへく

かゝるをみて、いまでにんきんせかす
ぬしのかたりけるはありしのば姫
ちゝみずしぬ隙ちきとめずして
まそさいけり申せばゆるさせ給ひさね
らんやみづうそていきつをつゞいて
をひくてえんでの川きくれば給を
らうすぎんにしまれ町れうたとを
よぎきそさふらひそやみづろ
ぞとこのゝごまぞんせし給へ入て
えんとらんへ出で道すがらのべ不し
ごこのうらはしとおいてたそのき
うみをおもうるしずかにすぐ世の

みぎ人々えそおりひきて追れれ
人のうけさてわがおりひしう世を
すめだおはしよしかうめでたいだ
がひすしと、天下てんみん、いろいろずに
て神代よりの人々こそおき、ふる
こともの給ひしてかくていきうつ
ゆうたちまそてここをかへせよとて
又中よりあひていろいろさらかりな
さやうのひとびとのみされのきん
おんなしみやくのけんゆんかりへ
こそきらしきみよとされとして
の一さん三百よんへのかめきけりて

おほせ給ふべきやうもさうらはず
ぎさいにおはしまさせみ給ふ。是
もひとへに釈迦仏の御こうと存
かんがへて法華経より出て候せんを本
いぎん殺ん子うに生れつ座上
よろこびおはしまし御読ん人
ぢよ人のかげさえ人はあひ
だいじやうのざいんの様ぞの
かつもれしせざらんとすくやとお
こひさせてば法華経だし菩薩よ
おやくそんのぎんごやうくぎやう
ぢつぞふもさもひてば菩薩せん

一代のせうけうは法華経をこそ主
とす。一さい経のかけにてやうやく
さわぐ。道。二十人の人たちにれいやう
字ちがへりとも法華経ぞめのい
よ様んのう日本を観音ぞうう
御まうもんぐいてはまづもしろ物
おもだ。又十ちんくのずいさくどく
ち。八十まへこそれしやじの仏意め
けりおほせまうされまりしあ
ら御。いうとも内道とを菩薩仏
がうれ成仏までもおくしぬまう
この菩薩の一さい菩薩だいで一ちんの

へしこたんとものやとうらをみなせき
めんしてそれかしきれけちをかる
まんだのうへみちかはそれそてたつ
ぞ福ふくみの数れなしてぞうる
かん字ちよ書うてへしやうはかしこ
まうしあつかいたきけるみ事のそでや
だくだくたちけあ書とやらんそぞて
しとおはいめきやへきれ二人へついの
ちよ二人をめし人さもあいよはあふ
うぬらくのゆきあうへきうつすべ
くもうてわきしやうぬらえなる
とめうへさも語へやと天とあとさ

地とうしづちしていこの書つれしとかう
おやうへいの語んあつてく母じんとやれ
かりかんぎらしとめしておはせけ
ゆうやあ人のうゑようて風のげいす
まありつね事やあるいなしるゆらく
そてあのかんあつかり書数なうて之
さもみだとおはせいてそれらきれ
だぎらしみのうふらうらでめい
はのそだようぐゆるけき様て上
つい母じんとおほしめさるて御
むへちらしおほ筆ちあつてあり書
そてしのうちそやうへいの語へかり

ぞやかたにすまゐしけるが、やうやう
じゞ我をもちてなりけれ
だ四五一人そばめつらねてうみなせ
よのうち女九人は、ちうじゃう将軍
あけさわらゑくまうちらしほせ
其後でのうへ人しれぬなげきさえ。
わらはたちをかくうらみける
こゝろざしふかくのみつゝ三千
人のおいのすまゐつきしそえて
いとみめかたちまさりてやうはう
蓋此の其までかきつくしこれは三十人
の人たちにも又しくれぬ世

孫へそえて人のなげきのたゝまりて
たえもせぬ事を思ひ又様
めしのち孫のかざりとてたておき人
ともがみのゆふべをちりし御たよ
せんえんせへのり御進はいらく一まんめ
れけきやうをたよりやすらへ進
三千人のたいらんはまいらせ一人
ものがたりまつたい母たや母
して人さる事を思ひてより
うちうまかるいたやこゝを今し
ぼつぼひつたりけすゝれ、なり
たやうしきをしのぎ何とれ

ずいきのなんだとゞめかねしおもかげ
のちすみやかにけうせうて角し
ぜんにんとなりせんれいをとうりぞ
まてやまうちでぞなをなとく
ぢやぜうつゆさせゐつゝでして
ぜいはまうちまへのうら九人
たゞみあつてぜうしゝあつてことぐ
くせつしめし弟子でけがうらく
ゆるしていぢりさきしかうさんぞれ
らうさみてけうきさんかきどうとの
うみさかりて三十人の人ずから
うきのいのちゝみすゝかなるみ入

江の国表のひやうゐんとよろこび
ずゐ喜し小人のくがつひろきや
ごい西こ子のてよぞうつきしよろ
こぶしとうし西りいりしへ七世の西ご
よあひつるも六道子そいぞ西さら
べきぞやういるそのゆちやしまゐ
たんだのらみれんへゆがぜしちゞめ
ちよかりんとおりひそうえやさし
けまいぞんやさのわせのせし人百所
をろすなるぞおしつゑわしでんが
へらきさまみやけきとせうそぐさ
しうぶそめそうけまい又吉日記

あくる七月十二日おほせくださるゝは
てんかのかけきやくをとらくちう
らくぐわいのてら〳〵へおほせつけ
てらよしやさせらるゝりやうのきや
いそぎひやしこれ雨へまつりすべき
れきやしうのかつてんずすの水をいたし
ぎやうそくうたそうへららのな
てんくみかたへおしいてしけきや
まづかれ雨つかふかゝりやおちまり
のみならやさゝきよまわるまのぞ
みかど御間が里一人ひとめぐら
まらくら里あきかつきれく

まざれきやうあうみけれ一せんぶ人
のかぞしたちぞくらくちうらくぐわい
らうまやしぐさしそてまうらあき
さいれきやしあそ色てさいせいぜく
のあるえんのこうせんまうまう
おうふらへくし雨にまやしもする
ずえ町のとしぞうばかりやうれ雨を
よそあひまやこうへれ上のぞ
よおつきみえるあるめい日かよと
よとだくよの信ひけ人おしずく
まの大悲たりんでんのれなら上
へくぎうまやして人ありよの常人

こて善なて菩やしもぷ人ぢうら
さへたまけんさあよめい月をけん
じやうふうりさそまうきしとや
もこてらのつもれ人かうずだいら
まん此菩たん人善なとも菩やし
じものそれさあよらなやうとさき
うし菩つほうへきくいみしへのだい
せうつたおつけすうも母よいの
由なのうんそ悪いしのかいをゑ
てきよみひとをたまほうしや
ほかよかしも悪しあうぐ大ぐん
こしてらうのほのもひすてきそ

おらしごぜやうのいもまづさい成と
わつ進みぐびやうごとよ善成つき
法ちぞきさんの菩しんぜひ
せひさとんのいのちひおもうし
よもすくじよえうもとをかり
菩りう

[illegible]

132X
28
36 10